様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　6 月　7 日現在

研究種目：　基盤研究（C）
研究期間：　2007　～　2009
課題番号：　19520097
研究課題名（和文）
　ガストン・ミジョン、ルーブル美術館初の日本美術コレクション学芸員
研究課題名（英文）
　Gaston Migeon, First Curator of Japanese Art collection at the Musée du Louvre
研究代表者
　ＳＣＨＷＡＲＴＺ　ＬＡＵＲＥ　（ＳＣＨＷＡＲＴＺ　ＬＡＵＲＥ）
　お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授
研究者番号：　20377013

研究成果の概要（和文）：この研究により、ルーヴル美術館日本美術コレクションの初代学芸員であり日本美術研究の歴史における中心人物であったガストン・ミジョン(1861-1930)の思想と功績が明らかになった。特にルーヴル美術館におけるミジョンの活動の先駆性、西洋における日本美術の評価、普及に与えた彼の影響に着目することで、日仏文化交流の重要な一段階を明らかにすることに貢献できたと考える。

研究成果の概要（英文）： The present research showed the importance of the Work and the Thought of Gaston Migeon (1861-1930), First Curator of Japanese Art collection at the Musée du Louvre and a central figure in the development of Japanese Art Studies. By stressing in particular his pioneering initiatives within the Musée du Louvre and his influence towards the evaluation and the diffusion of the Far Eastern Art collections in western countries, this research has contributed to reveal a decisive stage of the French-Japanese cultural exchanges.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００８年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２００９年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：美術史
科研費の分科・細目：哲学・美術　美術史
キーワード：ガストン・ミジョン、ルーヴル美術館、日本美術、コレクション、工芸

１．研究開始当初の背景

20 年ほど前から盛んになってきているジャポニズム研究、日本美術史研究関連の出版や展覧会によって、19 世紀末以降ヨーロッパで見られた浮世絵や建築、装飾美術に関する記述、これらに対する興味、あるいは情熱は、フランスや、イギリス、日本においても、現在では比較的よく知られたテーマとなっている。

西洋における最初の日本美術コレクションや万国博覧会、日本美術に関する最初の美術館や書物、それらにまつわる美術品コレクターや美術評論家、研究者らの役割といったテーマに取り組んだとりわけ優れた研究活動のうち、例えば 1999 年に東京国立文化財研究所の主催で 20 名ほどの美術史家が集ま

って行われた国際シンポジウム（「今、日本の美術史学をふりかえる」）を挙げることができる。1997 年に『明治期万国博覧会美術品出品目録』を出版したのもまた同研究所である。また、エディション・シナプス社刊のシリーズ『ジャポニズムの系譜』（馬渕明子監修）の中で出版された『稿本日本帝國美術略史』(2005 年)や、ルイ・ゴンス著『日本美術』、ウィリアム・アンダーソン著『日本絵画芸術』の解説も特筆に価する。フランスでは、日本の文化遺産の歴史についての研究の中で、クリストフ・マルケ氏がその重要な論文の中で、例えばエマニュエル・トロンコワの役割について明らかにした。マルケ氏はまた政治家、金融家でありながら、アジア美術のコレクターでもあったアンリ・チェルヌスキに関するシンポジウム（1998 年日仏会館にて開催）の責任者も務めた。ガブリエル・ワイズバーグ氏の監修で 2006 年に行われた「アール・ヌーボー：ラ・メゾン・ビング(*L' Art Nouveau : La Maison Bing*)」展のカタログ、また日本女子大学で行われた国際シンポジウム「林忠正－ジャポニズムと文化交流への貢献」の議事録、あるいは林忠正に関するブリジット小山氏の著書は、ジークフリート・ビング、林忠正といった、日本とヨーロッパの芸術交流の中で大きな役割を果たした人物らの重要性を確認させてくれるものであった。

以上のような研究の上に立ち、西洋における日本美術への関心と研究の歴史において、ルーブル美術館美術工芸品部門の学芸員として、同美術館に初めて日本美術コレクションを導入、紹介したガストン・ミジョンの重要な役割とその功績を明らかにしようとした。この偉大な東洋学者の名前は、先に挙げた書物や展覧会の中ではしばしば引き合いには出されるが、ミジョン自身に関する情報は分散的で、ほとんど知られていない。アーネスト・フェノロサ、ウィリアム・アンダーソン、ルイ・ゴンスといった日本美術史におけるその他の著名なパイオニアらと違い、このフランス人学芸員ミジョンの功績についてはいまだ未研究であり、この人物についてのいかなる伝記も体系的な研究も今日まで発表されず、日本、特に日本美術についての彼の多くの著書の日本語訳は一つも存在しないのが現状である。こうした状況と、日本と欧米の研究者らのこのテーマへの関心を踏まえ、本研究を提案し、大きな成果を得るに至った。

２．研究の目的

本研究はまず、今日ではあまり知られていない、日本美術研究史における中心人物の功績を再評価することが特色である。特にミジョンの活動の先駆性、西洋における日本美術の評価に与えた彼の影響に着目し、日仏文化交流の重要な一段階を明らかにすることを目指した。本研究計画の主な目的は従って以下の通りであった。

(1)ガストン・ミジョンの経歴と、著書の解説付き書誌を作成する。

(2)極東美術を展示する美術館の歴史と、西洋における日本美術普及の背景に立ち戻り、ガストン・ミジョンが1893年に初めてルーブル美術館に日本美術を導入した経緯とその目的を明らかにする。本研究では、この最初の極東美術展示室の状況を再現し、カタログやミジョンによる多くの記述を検証することで、この偉業の根本にあった考え方と方法論に焦点をあてようとした。

(3) 1906年秋に日本に派遣された後、1908年にミジョンが出版した『日本にて―美術の聖域への巡礼（Au Japon - promenade aux sanctuaires de l'art japonais-）』を分析し、ミジョンが多くの重要人物に出会い、日本の最初の美術館や主要な寺院、名所を巡り、これを記述し、そして今日ギメ美術館の最も古く貴重な所蔵品となっている絵画や彫像を手に入れたこの日本旅行の重要性を明らかにする。

(4) 今日はほとんど知られていないが、ヨーロッパの多くの美術史家だけでなく、岡倉天心やアーネスト・フェネロサといった日本やアメリカの著名な学者とガストン・ミジョンが結んだ交流に着目しながら、ミジョンの率先力、思考、著作を当時の国際学術ネットワークの背景の中に捉えなおす。

３．研究の方法

方法論的には、本研究は文献と視覚的資料の調査、理論と実践という二重のアプローチを特色とする。美術史家、学芸員、そして美術品コレクターとしてのガストン・ミジョンの功績を全体的に捉えるために、美術史に関する膨大のミジョンの著作を分析し、そしてルーブル美術館極東美術部門の責任者であった彼が自ら入手した美術品を調査することとなった。従って本研究は膨大な翻訳の仕事を含み、また今日その多くがギメ美術館に所蔵されている絵画、彫像、美術工芸品を直接的に調査することが必要となった。

本研究はまた、ガストン・ミジョンが自らも美術史研究の中で発展させた比較研究を重視するものであった。日本語を熟知し、文

献を通じて日本美術、日本文化をフランスに最初に紹介したクロード・メートルやノエル・ペリ、あるいは美術史家エマニュエル・トロンコワといった同時代の偉大な日本学創始者らとは違い、ガストン・ミジョンは日本語を解さなかった。しかし何よりヨーロッパ美術工芸品に対する深い知識に培われた比較研究的なアプローチ、ルーブル美術館における功績、そして日本への派遣滞在によって、ミジョンは日本の美術に鋭いまなざしを向け、美術史における分析方法にその後長く影響を与えることになるのである。従って、日本、中国、ヨーロッパ、そしてイスラムの美術の普及に捧げられたミジョンの活動や著書を突き合わせ、比較することで、ミジョンの博識を推し量りつつ、それが西洋における日本美術の展示や評価にどのように影響を及ぼしたかを明らかにできると考えた。

４．研究成果

本研究は、以下の三つの点において非常に有益なものとなった。

(1)三つのタイプの書籍の入手とそれらの分析（①ガストン・ミジョンの著書　②欧米におけるジャポニズムと日本美術史の発展に関する書物　③西洋と日本の工芸及び装飾美術に関する書籍）によって、日本美術の普及へとミジョンを駆り立てた歴史的、文化的背景に関するいくつかの点を明らかにすることができた。また、ガストン・ミジョンの美術史学、博物館学における考え方と功績の特色・意義を明らかにし、比較研究的視点から、また歴史的、国際的視野のもとにこれを捉えなおすことができた。

(2)フランス、アメリカでの数回に渡る研究滞在では、様々な研究施設や美術館（ボストン美術館、フランス国立図書館、フランス国立古文書館、ルーヴル美術館学芸員図書館、ギメ美術館附属図書館、国立装飾美術館附属図書館）の研究員、学芸員らの協力を得て、美術品コレクター、そして学芸員としてのガストン・ミジョン自身に関することのみならず、ルーヴル美術館における最初の極東美術コレクションの歴史に関する非常に多くの情報、資料（私的な古文書、展覧会目録、新聞・雑誌記事、書簡）を収集することができた。日本と同様フランスでもほとんどが未刊であるこれらの新資料から、特にアンシャン・レジーム期の著名な高級家具職人であったミジョンの祖先に関する知識を深め、そしてルーヴル美術館の初代日本美術部門学芸員であったガストン・ミジョンがフランスにおける日本美術の評価や展示に向けてとった行動に、ミジョン家に伝わる家業が何かしらの影響を与えた可能性があることを示すことができた。

(3) これらの資料の目録、写真、和訳によって、大学でこのテーマに関する新しい演習課題を設定し、比較日本学教育研究センターの活動の一環として、欧米における日本美術コレクションの歴史と受容に関する三つの大きな国際シンポジウムを開催することができた。そして、日本、欧米におけるガストン・ミジョンと当時の著名な学者、芸術家、収集家との関係に着目することで、美術史研究と日本、欧米の芸術交流に関する問題と研究の展望を、広く学生、研究者らと共有することができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① ロール・シュワルツ＝アレナレス、「ガストン・ミジョン(1861-1930)、ルーブル美術館極東美術コレクション初代学芸員 -日本滞在百周年にあたりその業績を振り返る－」『お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター研究年報』第３号2007　135-149、査読無し

② ロール・シュワルツ＝アレナレス、「ガストン・ミジョンとルーヴル美術館の中の日本　－知と技の継承、融合、変革－」『お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター年報』第5号 2009　155-170、査読無し

〔その他〕

① ロール・シュワルツ＝アレナレス（企画）・2007 年 7 月 8 日　お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター第9回国際日本学シンポジウム　セッションII

＊ 参考：ロール・シュワルツ=アレナレス　セッションの趣旨：比較日本学教育研究センター年報４号 2008、99-101

総合テーマ：ヨーロッパにおける日本美術史の成立と発展　－フランス及びイギリスの主要な日本美術コレクションの果たした役割－

研究発表
・クリストフ・マルケ（フランス国立東洋言語文化研究所教授）
「十九世紀後半のフランスにおける日本美術史学の黎明期　－江戸時代の画譜や『浮世絵類考』から『日本帝国美術略史稿』までの受容」
・鈴木　廣之　（東京学芸大学教育学部教授）
「誰が日本美術史をつくったのか？－明治初期における旅と収集と書き物－」
・永島　明子　（京都国立博物館研究員）
「フランスとイギリスで愛された日本の漆器　特にマリー・アントワネット蒔絵コレクションの成立と日本美術史上の役割について」
・彬子女王　（オックスフォード大学東洋研究所博士課程）
「ウィリアム・アンダーソンコレクション再考 」
・ニコル・クーリジ・ルーマニエール（イギリス　セインズベリー日本藝術研究所所長）
「大英博物館所蔵　日本の陶器コレクションの歴史」

② ロール・シュワルツ＝アレナレス（企画）
・2008 年 7 月 6 日　お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター 第10回国際日本学シンポジウム
総合テーマ：源氏物語の千年 －日本と欧米における源氏絵の旅－
参考： ロール・シュワルツ=アレナレス　セッションの趣旨: 比較日本学教育研究センター年報 5 号 2009、85-89
研究発表：
清水婦久子　（帝塚山大学教授）
「源氏物語の絵画性」
・原山絵美子　（お茶の水女子大学大学院生）
「『源氏物語』竹河巻の絵画化 －『あさきゆめみし』を出発点として－」
・エステル・レジェリー＝ボエール（フランス国立東洋言語文化研究院准教授 ）
「フランスにおける源氏物語　－テキストへの視線と絵画への視線－」
・渡辺雅子（メトロポリタン美術館アジア部門　主任研究員）
「米国における源氏物語イメージの美術史的研究活動」
③ ロール・シュワルツ＝アレナレス（企画）
・2009 年 7 月 5 日　お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター第 11 回国際日本学シンポジウム　セッション II
総合テーマ: 日仏交流の中のテキスタイル
―技術 デザイン、コレクション―
参考： ロール・シュワルツ=アレナレス　セッションの趣旨: 比較日本学教育研究センター年報 6 号 2010、47-52
発表者：深井晃子　（京都服飾文化研究財団チーフ・キュレーター、理事）
「日仏交流の中のテキスタイル：ジャポニスムとモードの視点から」
・オーレリー サミュエル　（ギメ美術館学芸員）
「ギメ美術館蔵クリシュナ・リブー日本織物コレクション：その研究と保存」
・高木陽子　（文化女子大学教授）
「染型紙とジャポニスム」
・円谷　智子　（パリ第 1 大学博士課程）
「メッセージ媒体としての現代スカーフアクセサリーに映し出された 20 世紀 －ガリエラ美術館コレクション－」
・廣瀬　緑　（パリ第 7 大学）
「染織とグローバリゼーション:アンディエンヌ(更紗)からジャポニスムへ」

ホームページ等

http://www.dc.ocha.ac.jp/dics-jacs/consortium/sympo200907/index4.html

http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/35033

http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/31366

６．研究組織

(1)研究代表者
Schwartz　Laure　(Schwartz Laure)
お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授
研究者番号：　20377013

(2)研究分担者
　なし
(3)連携研究者
　なし